2017.10.28　講演　於　:　上智大学

『　スカンジナヴィアのロックカービングと、アイルランドの石に刻まれた図象　』

　　　**いにしえ**人の図象の美が導いてくれた一つの仮説

私は、1979年に、画家･陶芸家・美術史家の大野忠男先生が企画された、アイルランドの第二次遺跡調査に参加させて頂きました。

約５０日間、アイルランドと北アイルランド各地を巡って、拓本を採集しました。

スクリーンでご覧頂く写真は、その拓本とその現場の写真です。

※スクリーンを指しながら説明

先ず、紀元前３５００年頃に造られた直径約９０㍍の円墳の正面や円墳の左右に配置された巨石に刻まれた渦巻きなどの図象と、石室内部の壁の石に刻まれた図象です。①～⑦

次は、紀元前３００年頃からアイルランドにやってきたケルト人が石に刻んだ図象です。

巴や唐草文様といったケルト独特の文様が刻まれています。⑧～⑨

そして次に、紀元４００年頃からアイルランドにやってきたキリスト教徒によって刻まれた墓石板の十字形です。⑩～⑮

その次は、７、８世紀頃、バイキングが来襲してきて、墓石板には組紐文様が全面を覆うように刻まれました。⑯～⑱

組紐文様のあまりに強烈だったために、これまで忘れられていたケルト文様が復活して、十字の中心にケルトの巴が刻まれるようになりました。⑲～㉑

その内に、ケルトの巴文様とゲルマンの組紐文様が十字の墓石に融合され、三つの文化が一つの墓石に表されるたのです。㉒

以上がアイルランドの紀元前三五００年から１２世紀頃までの石に刻まれた図象の美であります。

このアイルランド先住民と、ケルト、ゲルマンの刻んだ図象は、ギリシア･ローマ美術を代表とする具象の美とは別の、もう一つの美術の世界である事を知らされました。

美術の世界に二つの大きな流れが、具象の美と非具象の美、があることを認識させられたという事ですね。それは、私にとってかなり強烈な衝撃でした。

それから、大野先生は、北欧四カ国の遺跡調査を計画され、その予備調査に連れて行って頂きました。

そして、この北欧の予備調査は、先生と私に予期せぬ結果を招きました。先生は、その後の調査を打ち切りにされ、私にとってはその予備調査が出発点になりました。

先生が北欧の調査を打ち切りにされた理由は、恐らく、そこにはアイルランドで見たような図象を多く見る事が出来なかったからではないかと思われます。

ところが、私は、ノルウェーのフレデリックスタッドという所で、ある図象に目が止りました。㉓㉔

申し上げるまでもなく、それは中国の漢字の象形文字と重なる図象でした。㉕

車の他にも舟、人、などの象形と重なる図象も見られました。㉖

アルファベットの国に象形文字と重なる図象が刻まれていた・・・他にもあるのではないか？という疑問から、次の本格的な調査を待ちましたが、先生は打ち切りにされ、私は自分で調査しなければならなくなったという訳です。

実は、中国･西安の半坡遺跡の資料館に、アルファベットと思われる刻劃符号の刻まれた陶片が多数展示されておりまして、私はそれをじかに見ております。㉗㉘

また、現在、揚子江河口付近でも同類の陶片が見つかっていると、学習院大学の先生が中国文化会館で講演されたのを聞きました。

中国でアルファベットが考案されていたかも知れない、そしてノルウェー･スウェーデンでは象形文字と重なる図象が描かれていた、つまり、どちらの地でも今とは逆の文字体系に進む可能性があったという事なのです。

では何故、そうはならなかったのか？

そこの、出発点というべき処で、何かが、その選択を分けたのではないか。

その何かとは何か、

それは、人間形成にとって最も影響するものの違いが原因となったと思われるのです。

人間がまだ文明というものを持つ前の、始まりのところで、人間を形作るにとって最も影響するものは何かを考えたとき、それは、住まい、ではないかと考えました。

日々過ごす環境こそ、人が育っていくのに一番影響すると思った訳です。

ヨーロッパでは、乾燥していることと、冬の寒さが厳しいこと、石が多いことなどから、現在も多くの建物がそうであるように、地上がり式壁構造の建物です。

一方、東洋では、雨が多く湿度が高いことや、木が多いことなどから、高床式柱構造の建物です。

両者を比べると、壁構造の建物ではドアー一枚を閉めれば、完全に内と外とが遮断されますが、柱構造では、どこからが内で、どこからが外か、曖昧です。縁側などは、どこからが内でどこからが外か判然としません。

そのため、柱構造では、外からの視線を遮断するには、回りの柱と柱の間全てを塞がなければなりません。

ドアー一枚を閉めれば、完全に内と外とが遮断されるというのは、まさに合理的であり、全ての柱と柱の間を塞がなければ外と内を遮断出来ないのは、非合理的であるといって良いでしょう。

つまり、合理的な考え方と、非合理的な考え方とに分かれる一つの原因が、住まい・建物の構造にありました。

イエスかノー、とはっきり答えることが身に付いているのと、曖昧なままにする事に慣れているのは、建物の構造の違いにあると思えます。

そして、文字について考えてみますと、例えば、英語ならば、たった26文字で全ての言葉が表記出来ますが、漢字は数万字もなければ全ての言葉は表記出来ないのです。

これも合理的、非合理的という分け方に重ねられると思います。

そういう事から、中国では表意文字、ノルウェー･スウェーデンでは表音文字と、**とる道**が異なったのも当然の成り行きだったと思います。

* まとめとして

アイルランドで出会った非具象の美術に魅せられ、それがもとで、北欧へと向い、たまたま、そこで書を仕事としていた私にとっては見過ごすことの出来ない出会いがあった訳ですが、そのような出会いの組み合わせは、他の仕事をされる人にもあるのではないでしょうか。

**いにしえ人**の遺し、刻まれたものには、まだまだ色々なサインが気付かれずにあるのではないか。だからこそ、多くの人々に、拓本展を通じて、**いにしえ人**の図象を見て頂きたい、そう考えたのです。

それが、私が拓本展をしてきた理由なのです。

来年６月、多摩美術大学において、大がかりな拓本展が開催される予定です。

多くの皆様にご覧頂けましたら、幸いです。